

Room

A

大魔城
PANDEMONIUMの扉を開く

自筆原稿関係資料

Room Aでは、作家としての小栗虫太郎の仕事の全体像を提示する。小栗の作品は『黒死館殺人事件』が広く人口に膾炙し、いわゆる「三大奇

かいしゃ

書」の作家として知られてはいるが、それ以外の作品が広く紹介され、読まれてきたとは言い難い。

今回はじめて完全揃い原稿を紹介する『完全犯

のりみずりんたろう

罪』、そして法水麟太郎が登場することで名高い

探偵小説以外にも、怪異小説『白蟻』、新伝奇小

説『潜航艇「鷹の城」』、少年小説『成層圏魔

城』といった、数多くのジャンルの作品を精力的

に手掛け、多くの作品を残している。このコー

ナーでは直筆原稿、校正原稿などを紹介しながら、

作家としての幅の広さ、そして原稿から伝わる、

命を削るかの如しの気迫までをも紹介していきたい。

Room

B

戦火を生きて

従軍関係・菊芋関係資料

Room Bでは、小栗と太平洋戦争との関わりを資料を通してみてゆく。昭和16年（1941）

11月、陸軍は作家、新聞記者、漫画家などを、陸

いぶせますじ

軍報道班員として徴用した。小栗は、井伏鱒二、

かいおんじちようごろう

海音寺潮五郎らと共にマレー方面に従軍すること

になる。『小伝・小栗虫太郎』によると、現地で

はそれほど仕事はなく、専らイギリス軍が残した本を探し、マレー語を勉強していたということである。帰国したのは翌年の暮れのことであった。

また、小栗は敗戦の前年頃より、長野県小諸地方に疎開し、休業中の工場を借りて、ここで多産する菊芋から果糖を製造する事業を始めている。戦時下の食糧難とエネルギー不足を解消しようとする壮大な試みであり、それは小栗なりの「銃後の戦い」であった。

Room

C

作家として、父として

家族・交友関係資料

Room Cでは、小栗ゆかりの様々な品物から、彼の人間像や交友関係を検証してゆく。小栗の人間なりを知ることができる資料は決して多くないが、雑誌に掲載されたインタビュー記事からは、当時の文壇での小栗のイメージを垣間見ることが出来て興味深い。取材ノートは、中の記述に複数の筆跡があることが確認できている。原稿の清書のほか、取材においても家族を含む何らかの協力が存在していたと思われるが、その実態については今後の研究と検証が待たれる。また、作家との交友においては、日本SF小説の鼻祖の一人としても名高い海野十三が親友であったことが知られ、江戸川乱歩えどがわらんぱとは、小栗の没後も小栗家の家との連絡が続いていた。

Room

D

小栗虫太郎、永遠に

没後出版関係資料

小栗は同時代のみならず、後世の作家にも多大なる影響を与え続けており、その博覧強記で銜学的な「虫太郎ワールド」は各方面に引き継がれている。絶筆未完の作品を強い意志をもって完成させようとする作家がいれば、小栗の世界観を音楽で再現しようとする者もいる。また、日本の探偵小説運動は、「幻影城」編集長を務めた傳博などを通じ、台湾にも継承されている。諸作の出版において、今日でも各国語で翻訳書籍が出版されており、海外にも熱烈なファンがいるようだ。生前から評価の高い作家であったが、没後の評価はますます高まる一方である。虫太郎死すれど、その魂は彼に魅了された者たちの中で永遠に宿り続けるのだ。

Room

E

小栗虫太郎ワンダーランド

関連図書・関連雑誌紹介

ここでは本学所蔵の小栗虫太郎関連書籍や研究書を紹介したい。今回の企画展示を通じてはじめて小栗を知った方もいるだろう。小栗を特集した本としてまず挙げられるのが『小栗虫太郎ワンダーランド』だ。著名な作家や評論家たちがこぞって独自の小栗論を展開しているのが面白い。直近では山口雄也やまぐちかつや（素天堂）による注解が付いた『【「新青年」版】黒死館殺人事件』が刊行され注目を集めている。その他、『黒死館殺人事件』のモチーフとなったゲーテ『ファウスト』、今回の展示のサブタイトルである“pandemonium”という単語が造語として初めて使われたミルトン『失樂園』なども並べている。小栗の深淵へと通じる扉はまだ開かれたばかりである。この先、新たな扉があなたを待ち受けているだろう。